

被災後の私たちの動き

小高の住民による個々の動きは、復旧に向けた作業や店舗の再開、新事業など、避難直後からはじまっています。

緊急事態によってばらばらになりましたが、小高住民による声かけによって二千人単位で集まったこともありました。

またなかにて、そうした個々の動きが一つになっていったのは、二〇一二年初夏でした。

『すばらしい「またなか」にする会』は「事業者の再開と地区住民の帰還意向を把握」して、小高の新生ビジョンを標榜しました。商工会や行政区単位の展開はあったものの、国や東京電力の補償や賠償、除染計画とその遂行など、強くて一方的な影響力を受ける中で、ビジョンが実現していく状況ではありませんでした。

しかし、重要なことは、小高の住民自身が立ち上がったことではないでしょうか。

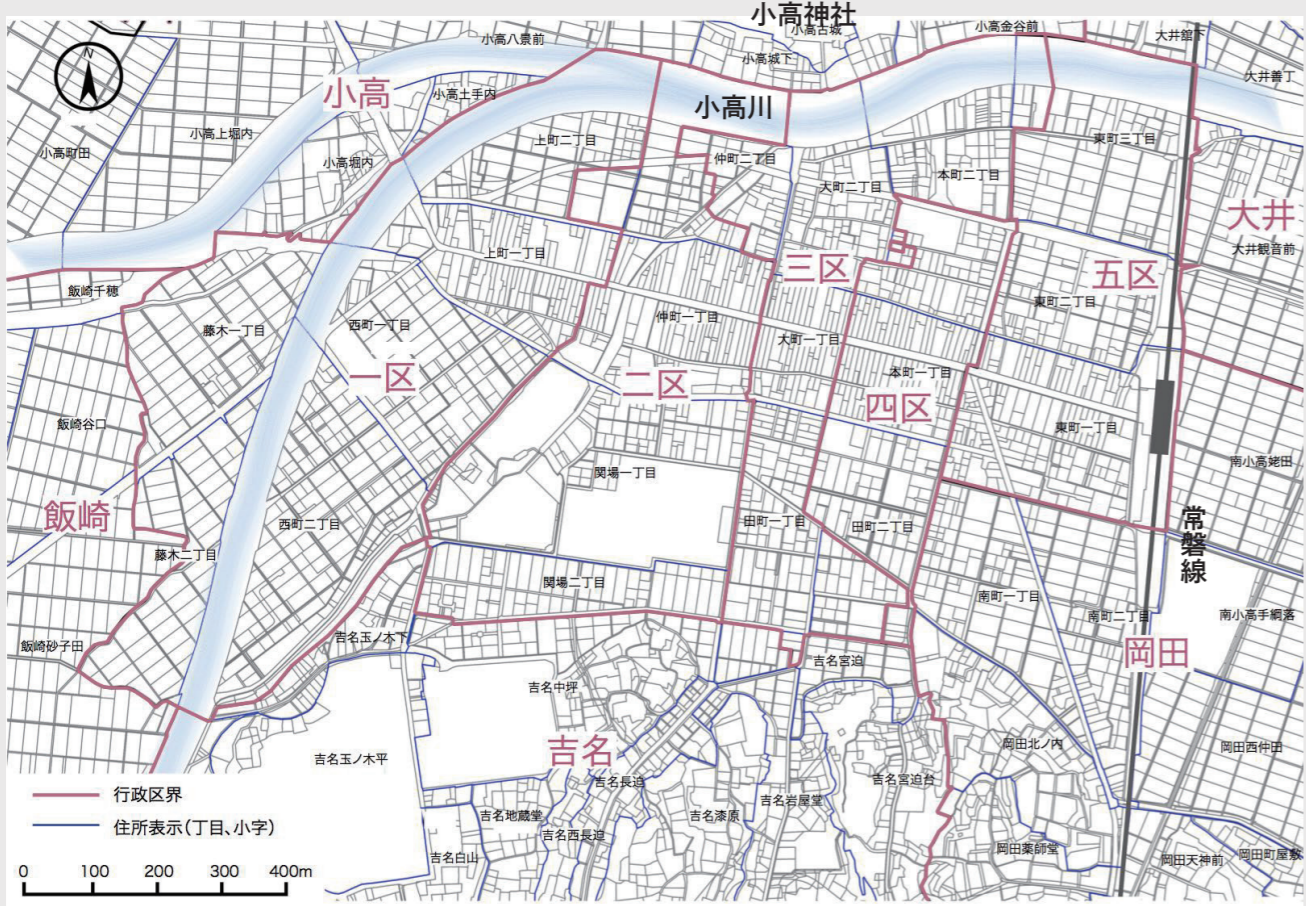
再度、自分たちの構想を作ろうという機運が高まったのは二〇一四年冬でした。小高地域協議会の提案で地域構想ワーキンググループが設置され、行政とも協働しながら今に至ります。



▼地域構想ワーキングの2014年活動の詳細は「小高志」No.1 (2015.6)をご覧ください。

二〇一五年二月、「南相馬の未来会議」は、市の計画の自主的パブリック・コメントを行いました。七月の第二回では、小高の将来像が話し合われました。

その本質は、何となく帰還するのではなく、小高というまちを選んで帰還すること、すなわち小高を「選ばれるまち」にしよう！ということでした。



またなかプランの範囲

二〇一五年四月、南相馬市では避難指示解除が予定されています。そこで、七つの柱の三本目にあるように、まず、またなかに着目します。

またなかプランの範囲は、厳密なものではありません。地形や生業や歴史、現在の環境をふまえて、ひとまとまりとなつている範囲としました。

具体的には、小高神社や小高川までを北と西側として、常磐線が東側、南側はなだらかな傾斜地までです。

行政区でいえば、南小高（二～五区）、小高、岡田、吉名のそれぞれ一部です。

行政区は、住民の意見が反映される、小高におけるまちづくりの最小単位として非常に重要です。自発的な動きが活発なものもありますが、そうでないものもあり、多様な活動支援が必要です。

批判的検証から、未来のまちづくりの姿勢へ

東日本大震災から四年半、厳しい日々が続きました。せめてこれまでの動きを批判的に検証し、未来に向けて学ぶべきことを次に生かし、同じ轍を踏まないように考え方を整理します。

住民

支援はありがたいものの、受け身の姿勢になりがちです。以前は当然だったお互い様の気持ちが薄らぐこともありました。

自主性や能動性

やりたいこと、やるべきことを積極的にやりましょう。各自が得意を持ち寄って、できないことを補い合いましょう。

行政

情報が不十分だったり、遅かったことがあります。非常時なのに、日常と同じまま、硬直的な対応だったこともありました。

情報の早期提示と共有

住民に良かれと思うことを勝手に決めるのではなく、相談してください。

住民に役立つ柔軟な対応

住民にとって有益な結果を、柔軟に求めてください。

協働

これまで必ずしもうまくいかなかった程度や賠償問題などで地域社会が分断している側面もあります。

想いと方向性の共有

小高に魅力を感じている人が、その想いを共有することが協働の第一歩です。

分断をつなぐ信頼

協働して復興に取り組み、信頼も取り戻しましょう。